

派遣先所属 宮城県経済商工観光部企業復興支援室
氏 名 鈴木 秋奈 (すずき あきな)
派遣期間 平成28年4月1日～平成30年3月31日

1 派遣業務の内容、現況

派遣先の企業復興支援室では主に中小企業等グループ施設等復旧整備補助金（以下、「グループ補助金」という。）に関する業務を行っています。当補助事業は、震災により甚大な被害を受けた地域（宮城県内では17市区町が対象エリア）において、中小企業や個人事業者、商店街振興組合がグループを組織し、それぞれが考えた復興事業計画が、産業活力の復活、被災地域の復興、コミュニティの再生、雇用の維持等に重要な役割を果たすと県の認定を受けた場合に、その個々の事業者が施設（建物）及び設備（車両、機械 など）の復旧に要する経費の一部を補助するものです。

まず、被災した中小企業や商店街振興組合といった事業者は、グループを組成し、復興事業計画を提出し、県の認定を受けます。

次に、認定を受けたグループの各事業者は、各々が被災した施設・設備の復旧について復旧事業計画を提出し、県の審査の後、補助金の交付決定を受けます。

事業者には、計画した施設・設備の建設や購入、修繕に係る費用の3/4 までが補助され、その財源は、補助金の2/3 が国費、1/3 が県費で負担されます。

担当業務は、各事業者に対するグループ補助金の交付及び復旧事業の進行管理が主となります。グループ補助金は、購入や修繕が完了した後に交付（精算払）するため、事業計画どおりに復旧事業が行われたかどうか書類審査及び現地調査（履行確認）を行います。まだ復旧事業が終了していない事業者に対しては、進行管理や相談指導などを行っています。

また、グループの復興事業計画の募集及び認定に関わる業務も担当しており、12月には第20次申請に対する交付決定を行うため、申請を予定している事業者との相談を行いながら、説明会の開催や資料の準備を進めているところです。

所属する企業復興支援室は、職員19名のうち自治法派遣職員が6名、任期付職員が3名、臨時職員が2名、県のプロパー8名で構成されており、様々な人材が寄り集った職場です。派遣職員は、埼玉県、東京都、千葉県、富山県、愛知県、奈良県の職員が集まっています。全員がグループ補助金事業に携わっているため、業務でわからないことや処遇困難ケースに対しては、互いにフォローし合いながら仕事を進めています。



県庁近くの定禅寺通り



県庁1階にある県のキャラクター「むすび丸」
(この写真はハロウィンバージョンです。)

2 被災地の復旧・復興の状況

宮城県では、平成23年10月にその後の復興の筋道を示す「宮城県震災復興計画」を策定しています。この計画は、復興を達成するまでの期間を概ね10年間とし、平成32年度を復興の目標に定め、その計画期間を「復旧期」、「再生期」「発展期」の3期に区分しています。平成29年度はこの中の「再生期」最後の年であり、来年度からは「発展期」に入ります。

担当する事業者は、北は岩手県と接する気仙沼市から、南は福島県と接する亶理町、山元町まで、宮城県の全ての沿岸地域にあります。石巻市より北の気仙沼市まではリアス式海岸の湾奥に集中して人が住み、漁業が盛んであった場所、石巻市から南の仙台港、仙台空港周辺から亶理町、山元町にかけては、被災前は工業団地や住宅地のほかは田圃が広がっていた平野です。

上記のエリア内で、今年度に私が業務で何度も足を運んだのが石巻市・東松島市のエリアです。石巻市は、仙台市に次ぐ人口規模の都市ですが、被災住家数が被災前全住家数の76.6%に及ぶほどの大きな被害を受けたところです。施設を再建するにしても、災害危険区域に指定された場合、同じ場所に新築・建替・増改築ができません。再建する土地がなかなか工面できず、復旧事業の遅れに繋がる場合や復興整備計画に基づく土地利用計画が思うように進まず、事業が進められない場合もあります。こうした他面的理由に加え、震災後、経営が思うように伸びないことから資金繰りが難しく、事業を行える目処が立たない場合もあります。事業者によって抱える課題は様々ですが、せつかく交付決定を受けても「復旧」への一步を進められないこともあるのが現状です。

日常生活でも、被災当時の様子を聞いたり、直接被災地に赴いて被害や復旧の状況を目にする機会が多くあります。県が運営する研修施設「志津川自然の家」(南三陸町)が運営する事業に参加する機会がありました。この施設は、シーカヤックや海釣り、ヨットなどの海のアクティビティを大人から子供まで楽しめるプログラムを毎年、震災直前まで行っていました。しかし、そ

のための船や道具が全て流出したり、堤防が崩れたりした影響もあり、事業を復活させることが難しかったそうです。震災後の平成28年4月、施設の改修工事も完了し、ようやくリニューアルオープンしました。それに併せて、船などの道具も新しく購入し、事業も再スタートしました。事業を運営する職員や震災前に参加したことがある方も非常に喜んでいる様子でした。リニューアルオープンの話を聞いて、わざわざ東京から参加する方もいました。津波被害があつてから、県内では子供たちを海に連れて行くことをためらう親も多いという話も聞きます。職員の方々が、「子供たちにもう一度海の楽しさを学んでほしい。」と仰っていたのが印象的でした。

現在、仙台市内では被災の痕跡を目にすることはありませんが、ちょっと足を運んで沿岸部へ出てみると、土地の嵩上げや道路整備等の工事のため、重機が行き来している様子をしばしば目にします。こちらで暮らすと当たり前の風景ですが、その一方で、業務報告等で埼玉県に帰ると、首都圏のメディアでは震災関係のニュースは余り取り上げられなくなっています。そのため、関東に暮らす友達や家族が遊びに来るときは、できるだけ仙台市内以外も案内するように心掛けています。



石巻市牡鹿半島の沿岸部



気仙沼市嵩上げ工事の様子

3 被災地へ派遣となって感じたこと

宮城県に派遣になって2年目となり、良かったことは、現地の宮城県職員はもちろん、全国の派遣職員と知り合いになることができたことです。被災地派遣に応募しなければ、こんなに全国の自治体職員と知り合うことはできなかったのではないかと思います。北は北海道、南は九州まで、震災から6年以上が経過した今も全国から派遣職員が応援に来ています。派遣職員は「被災地の復興のため」という志をもって来ていますが、震災直後にボランティアとして来たことがあり、仕事で赴任してからは週末にボランティア活動を行っている人、東北の山々を楽しんでいる人、東北の食べ物を楽しんでいる人など、仕事以外の部分も大いに満喫しています。

今年度、私は東北・みやぎ復興マラソンに参加しました。フルマラソンは初めての挑戦でしたが、知り合いと参加したこともあり、辛くも楽しく達成感のある体験でした。大会のコース全域は東日本大震災で甚大な津波被害を受けたエリアですが、現在は、少しずつ復興が進んでいます。防潮堤、嵩上げ道路、千年希望の丘、記念碑、ゆりあげ港朝市など、震災復興のシンボルとして新しく整備されたエリアや、日和山（ひよりやま）、閑上（ゆりあげ）など震災当時の面影を残すエリアを通りました。地元の方々がコースの途中あちこちで応援してくださり、手作りの横断

幕もよく目にしました。特に、自分が担当する事業者が手を振って応援する姿を目にしたときは、とても嬉しかったです。

この大会は宮城県外からの参加者が非常に多く、約1万5千人ものランナーが参加しました。今年度が第1回開催だったので、来年再来年も多くの人に参加し、復興の様子を実際に目で見て、肌で感じてほしいと思います。



他県の派遣職員と共に無事完走しました！